

柿本神社（益田市）蔵「堂上御奉納和歌」

— 紹介と翻刻 —

芦 田 耕 一

島根県益田市にある人麿の御神霊を祭る柿本神社には、短冊で奉納された多くの法楽和歌が宝蔵されており、このうち堂上の詠んだものが折本仕立ての六帖に収められる。これらはいずれも文部省指定の重要美術品である。時代的に最も早い享保八年（一七二三）三月十八日奉納分については既に触れたことがあり（この三月十八日注に人麿千年忌法要が行なわれている）、これ以降の残り五帖をここに一括して紹介、翻刻しておこう。

もともとこれら短冊は木箱で奉納されたものであった。いま収める折本は縦四一・二糎、横一八・二糎である。一帖には各五十葉が、各折に二葉ずつ糸で付けられている。各帖は真ん中に題簽があり、「桜町天皇宸翰三葉以下五十葉^二」（一）、「桃園天皇宸翰三葉以下五十葉^三」（二）、「後□□天皇宸翰五葉以下五十葉^四」（三）（二字分割離しており、奉納年時から後桜町天皇と思われる）、「光格天皇宸翰三葉以下五十葉」（四）、「仁孝天皇宸翰三葉以下五十葉^五」（五）とある。

各短冊は縦三六・六糎、横六・〇糎と同じ大きさで、内曇り、書式は型通りである。歌題については、その時ごとに一筆であり、和

歌および作者名は詠作者が書いたものであろう。作者名表記がないのは御製である。（四）については、御製の計六葉は誰の詠か区別しがたい。

各帖を簡単に述べよう。

（一）は延享元年（一七四四）八月二十八日に奉納された。『統史愚抄』同日条に、

有柿本両社播磨和哥御法楽一左衛門督光綱詠進。

とある。播磨国柿本神社（兵庫県明石市人丸町）への奉納については未調査である。詠作者のうち、家仁・職仁・直仁・尊賞・貞建が皇族である。（二）の奉納は宝暦十年（一七六〇）五月十八日であるが、他にはみえない。典仁・堯恭が皇族である（既出者は除く。以下同じ）。（三）は明和四年（一七六七）五月十八日奉納であるが、他で確かめられない。ただし、同年の三月十八日（人麿の没したとされる日）に「小御所」において「柿本神影供」が催行されている（統史愚抄）。皇族は天皇以外は既出の人物である。（四）は寛政十年（一七九八）三月三十日奉納であるが、これも他にはみえない。皇族は美仁・邦

頼・深仁である。(五)は天保十四年（一八四三）六月十一日奉納であるが、これも他にはみえない。皇族は職仁・韶仁である。

このように、皇族だけを挙げたが、他の詠作者はほとんどがその時にあるいは少し後になって公卿に列している人たちである。

ここに、これは当時の堂上の詠歌そして歌壇の一斑を知り得る好資料となりうるであろう。

注 「島根大学附属図書館蔵『人麿御奉納百首和歌』―紹介

と翻刻―」（本誌、第八号）

凡 例

一、翻刻にあたっては、用字法・仮名遣いなど忠実であることにつとめたが、旧漢字や異体字については通行の字体に改め、読解の便をはかって濁点表記を施した。

一、解説しにくい場合は「(〇〇カ)」と傍記して推定本文を示しておいた。

一、短冊は型通りの書式であるが、ここでは作者名を歌題の下に置いた。

一、最後の短冊は表に和歌、裏に奉納年時等が書き付けられているが、ここでは収められているままに従っておいた。

一、末筆ながら、貴重な短冊の翻刻を快諾していただいた柿本神社宮司中島匡英氏に深謝の意を表したい。

翻 刻

(一) 桜町天皇宸翰三葉以下五十葉 二

山早春

石見のやたかつの山のほのくとかすみそめたる神がきのはる

鶴立洲

うつすともえやはおよばむあしたづのすさきにむれて遊ぶ松かげ

松鷲

通兄

小松ぼらけふひきつれて行野べになれも初ねとうぐひすのなく

梅風

兼香

行まがふたもとも深くにほふらし野べはさかりの梅の下風

故郷柳

重季

あさみどり垣ねあらさぬ青柳のかげもいく世をふる郷の春

夜帰雁

家仁

鳴てゆくおぼろ月夜の春の雁とをき越路の空やまどはむ

峰春月

職仁

まちいづる月はえならぬにほひかなかすむたかねの花の木のまに

尋花

俊逸

いぎけふはこそこの山みちあとゝめて花やさきぬとたづねてをみむ

見花

内前

みても猶あかぬ色哉かつらぎの雲さへ匂ふはなのさかりは

落花

実楨

花ぞ今雪と散くる山たかみまがひし雲の道もとまらで

春山田 直仁

ときぬと苗代いそぐますら男やうしひきつれてかへす小山田

岸藤 雅香

池水のいひしらぬえを松が枝にかけてぞみする岸の藤浪

新樹 尊賞

見し秋の月の木間やいづくぞとたかつの山のしげり行ころ

聞郭公 通夏

またとはむ夕ぞたのむみか月の雲間ほのかになくほとゝぎす

早苗 光綱

さみだれの晴間まちえて賤のめや千町の小田に早苗とるらむ

夏月 重熙

夏としも誰かいはまし石見がたなみぢすゝしき月のさやかぜ

夏草 栄親

日にそひてしげりもゆくかあげまきもかよはぬ野辺の夏のくさ葉

は

夕立雲 栄通

ひとむらの雲たちおほひなる神の音もはげしき夕立のそら

納涼 貞建

ゆふすゝみあつさをよそにむすぶ手のあかずもあるかな松のした

水

草花 公福

さまざまに咲まじりつゝやちぐさの色を野もせにつくす秋かな

野外虫 清胤

秋さむみ野べはいづくの草根にもよるゝ虫の声ぞうらむる

園鹿 道香

うき妻に猶やこゝろを岡のべのまつ陰さらずをじかなくこゑ

海上霞 光栄

雲も今朝なぎたる海やすゑ遠くかすむみるめのかぎりなるらむ

月出山 直仁

たぐひなや雲なき峰の松ばらの木のまさやかにいづる月かけ

橋月 為村

かは風に霧はとだえてくるゝ夜の月すみわたる水のうき橋

関月 兼胤

あき風にうら浪はれてかげもなを清見がせきの月のくまなさ

擣衣 職仁

しづの女がたがためとてか秋風のよさむの衣うちしきるらん

秋時雨 為香

そめ出むこずゑの秋をいそぐとや冬をもまたでまつしぐるらん

残菊句 頼胤

うつろはでにほひもふかく置霜のまがきにのこるしら菊の花

紅葉 兼香

此比は松のこずゑのうすくこくそむるもみぢの色ぞえならぬ

暮秋 俊将

露しげき庭のあさぢもうらがれてむしのねよはる秋のくれがた

朝木枯 職仁

紅葉はさそひつくしてふく音のまつにはげしきけさの木がらし

寒声 内前

なにはがた入江をさむみまく霜にかれわたりたる声のむらだち

河千鳥 雅重

ふけてなをさゆる河辺のさよ風をわびて千鳥やたちさはくらむ

初雪 光栄

いつしかとまたれしながら朝戸出の庭におどろく木々の雪かな

深雪 重豊

松たけのけぢめもけさはわかぬまでふかくぞつもある庭のしら雪

鷹狩 隆古

あかなくにくれしきのふの野べにきてまたかりごろも猶や分まじ

炭竈 家仁

降つもある雪のあしたもすみがまの煙はそらにみえてまがはぬ

忍久恋 通夏

年月をかぞへてそでにせく涙つゆばかりだによそにもらすな

待恋 公福

いく夜はかわがまつ戸のさしもかくつれなき人をなをたのむら

む

別恋 宗家

ひきとめぬ名残はうしやにぐるまのわかれていづる人のたもとを

頭恋 実称

つゝみこしそでの涙のいつよりかもれてうき名の世にはたちけむ

恨身恋 重季

恨わびおもひかへすも今更にうき身からなる人のつれなき

旧恋 貞建

あふとみる夢もむすばでとしをへぬかはせし夜はもありし枕に

浦秋夕

雲そむるあまの磯やのゆふけぶりきりにたちそふ秋のうら波

松積年 光栄

君が代に千年もつもれさかへゆくかげたかさこの松のこの葉

巖苔 道香

いつとなく露もかはかぬおく山のいはほの苔ぞ深みどりなる

名所市 通枝

知しらずゆきてしかまの市人はなにをかちぬとさはぎ立らむ

述懐

みち守る神もかくこそあきらけき君が代ちよと思ふこゝろは

御奉納 石見国 (表)

延享元年八月廿八日 柿本社 御法衆

祝言 公福

うごきなきたかつの山のよゝかけて神のまらむ道はたえせじ (裏)

(二) 桃園天皇宸翰三葉以下五十葉 三

早春霞

春きぬといはねどけさはいはみのやたかつの山のかすむにぞしる

峰月明

さやけしなみねの雲霧ふきはらふあらし待えていづる月かげ

若木梅 光綱

するとをき春の色香を初花にこめてわか木の梅やさくらむ

遠帰雁

道前

見るがうちに声もつばさもはるくとかすみにきえてかへるかりがね

夕春雨 典仁

いとゞしくかすめるそらとみしはやゝ雨になりゆくはるの夕暮

花初開 雅香

さきつがむ色香もこもるかた枝は春を伝えてにほふはつ花

花満山 職仁

雲とみしよしのゝ花やみねふもといまもさかりに咲ぞつむらむ

花如雪 栄通

さくはなの梢をさそふ春かぜにさながら雪のちるかとぞ見る

躑躅紅 家仁

紅のいはねのつゝじこゝかしこみねにも尾にもさかりをぞみる

暮春月 頼要

したふぞよ弥生もいまは未つかた春のなごりの有明の月

朝更衣 尚実

いつしかとはなの袂をぬぎかへてけさはすゞしきせみの羽ごころも

待郭公 実茂

此比はまつにねぬ夜をかさねてもなく音つたなきやま郭公

早苗多 頼胤

おさまれる御代には民もにぎはひて千町の田面さなへとるかな

磯夏月 実岳

夏しらぬみるめをよせて浦風になみこす磯の月のすゞしき

夕立過 有美

うき雲はほどなく晴て遠かたにはやくも過る夕立の空

鶯知夜 実繩

くるゝ夜はかずあらはれて池水に飛かふほたるかげぞうつろふ

初秋露 典仁

風はまだをとにもたてぬ荻の葉につゆをきそめて秋は来にけり

七夕別 為村

けさこそは立わかれてもこん秋のちぎりやかくるあまのかは浪

草花早 兼胤

咲つがむいろのちぐさの秋をとまづみせけりな萩のはつ花

余寒風 内前

今朝はまだかすまぬ春の空さえてゆきをもさそふ風のはげしさ

野径虫 通兄

ゆくゝも心ぞとまるなく虫の声もちぐさのあきの花野は

深夜鹿 光村

つきにふく笛かときけば小夜ふけて秋かぜとをき棹鹿の声

海辺月 輔平

いづるよりみるめさやけきわたつ海の浪をてらしてはるゝ月かげ

晩夏蟬 宗家

秋ちかくならの葉そよぎ吹かぜのすゞしさそへて蟬や鳴らむ

橋上月 家仁

影てらす月にたどらで山河のわたせるはしをかへる柴人

遠擣衣 重豊

あかつきはものにまぎれずさと遠ききぬたの音もほのかにぞきく

河紅葉 公文

山河のながるゝ谷も秋ふかきいろをぞうつす木ゝの紅葉は

柿本神社（益田市）蔵「堂上御奉納和歌」—紹介と翻刻— 芦田耕一

杜時雨

〔兼九〕
□恭

木葉さへ猶ふきとびぬ風さむきけしきの杜の今朝のしぐれに

池寒声

資枝

風にふししほれて冬がるゝいけのみぎはの芦の一むら

寒夜月

尚実

石見がたなみの千さとかぜさえてひかりも氷るふゆのよの月

浜千鳥

なにはがた夕波ちどりゆふしほのみつのはまべに立さはぐ声

野外雪

職仁

秋分し花はいづくぞしろたへにふりつむ野への雪のした草

松雪積

実岳

つもれ猶君がみるべき十かへりのはなをもかねてまつのしら雪

夕炭竈

道前

小野やまのゆふべくはすみがまのけぶりぞ空に立まさりける

寄風恋

通兄

こぬ人やよそにきくらむひとりねにふけ行夜はのまつ風のことゑ

寄雨恋

公雄

ふる雨をかごとになしてとはじとは思ひたえても人ぞまたるゝ

寄山恋

兼濟

おもひいるこゝろひとつをしるべにて分まよひ行恋の山みち

寄海恋

通貫

しらせばや見そめしよりもわたつ海のちひろのそこのふかきおも

ひを

寄草恋

〔兼九〕
□恭

いとすゝきむすぶ契りは夏の野にかくいつまでかおもひみだれむ

寄木恋

為泰

みをうらのあまの藻塩木こりもせでからき思ひにくちなんはうし

寄鳥恋

輔平

またいつと名残をおしむ手枕にわかれをいそぐ鳥のねぞうき

寄虫恋

雅重

うしや人今は契りもかげたえてよそにのきばのさゝがにの糸

暁更鶏

内前

相坂や告わたる鳥のこゑくにはや関のともあけがたのそら

遠村煙

為村

一むらの木末の夕日かげはれてけぶりよこたふをちの山もと

山家鳥

国栄

しづかなる山の住るはさまぐの鳥の鳴音を軒ばにぞきく

田家水

重熙

ほたるとぶひかりも涼し賤がすむかど田の水のこなたかなたに

名所浦

職仁

よゝかけて松のこと葉の道たえずいやさかへ行和歌のうらなみ

羈中衣

基名

旅ごろもうらめづらしきうみやまのつきにかりねの袖ぞすゞしき

独述懐

雅香

おろかなるわが身ながらもつかへきてもれぬめぐみをしるもかし

こし

御奉納

石見国

宝曆十年五月十八日 〔表〕
柿本神社 御法業

寄神祝 光綱

うごきなくたかつの山にいく千とせ君がみちをば神はまもらむ

(裏)

(三) 後 (桜野カ) 天皇宸翰五葉以下五拾葉 四

山早春

陰あふぐたかつの山は春きぬとまだきのどかにかすみそめぬる

聞郭公

きゝてしもなをこそしたへほとゝぎす雲るはるかにもらす一こゑ

浦秋夕

夕づくひうら波とをくさすかげもさながら秋のみるめさびしき

深雪

さむけしな下をれかひて松竹にいく重ともなくつもるしら雪

待恋

このくれをたのめしまゝにまつとしも人はおもはでとひこぬぞう
き

故郷柳

家仁

ふるさとの春にがはらず色そひて老木のやなぎうちなびくかけ

尋花

通古

たづねいる霞のおくにさく花のおもかげにほふ峰の白雪

落花

為村

ふむはおし山したかぜの桜花木の葉の雪となべてふれゝば

峰春月

為泰

神がきの花にほふも高角のやまのはたかくかすむ月かけ

岸藤 重良

池ひろき岸ねの浪に紫のいろをひたしてさける藤が枝

新樹 職仁

松杉のけぢめも夏をわかみどりひとつにしげる木々のすゞしき

早苗 内前

うちむれて賤はもすそをほしもあへず水せく小田のさなへとるこ
ろ

春山田 光村

たねひたすかたへかすみて山がはの水せきわくるはるのあら小田

見花 職仁

雲とのみまがひてし色はさもこそとはなのさかりをみよしのゝ山

夕立雲 為村

たゝみなすいく重の峰にうつる日のひかりまばゆきゆふだちの雲

寒芦 公明

よる波のをとはきこえずこぼる江にあさかせさやく霜のかれあし

夏月 実繩

やはらぐる光もそひて夏の夜はすゞしくてらす神がきの月

夏草 光房

夏ふかくしげる草葉にいろわきてさかりばへあるなでしこの花

納涼 時行

むすぶ手に夏もわすれて山かげの岩がねきよき水の涼しさ

夜帰雁 輔忠

はるのよの月と花とをよそにみてこゝろつよくも雁やゆくらん

草花 内前

さまざまの色をまじへしさかりなる秋のちぐさのはなぞめかれぬ

野外虫 為栄

よるも猶秋の花野の露わけてゆくくめづるむしの声々

岡鹿 織仁

夕日さす岡への松のねにたててしかやつれなき妻をとふらむ

月出山 兼胤

世をてらす神のころもあきらけきたかつの山にいづる月かげ

橋月 為村

はし姫のかたしく影もふけぬらし月さむくなる宇治のかは風

関月 栄通

せきもりもくまな^(ママ)さあかす見る月のかげやとゞめぬ明がたのそら

擣衣 為章

さと遠く賤がきぬたをうつ音も月にさやけきあきの夜なく

秋時雨 職仁

秋ふかみ吹をとさむきやまかせにふゆまちあへずしぐれふる空

残菊句 公雄

秋ふかき霜のまがきに今もなをさかりふりせでにほふしら菊

紅葉 益房

秋毎にころをそめてあさからぬきゞのもみぢをあかずこそみれ

暮枝 資枝

くれてゆく秋の余波とみるも猶残りすくなきなが月のかげ

梅風 雅重

さかりなる木かげゆかしく春かぜのたよりにをくるよそのむめ

が、

河千鳥 為泰

さよ千鳥つきに逢せやなみこほる河かぜ寒みなきわたるらむ

初雪 典仁

降そむるたかつの山のみねの雪けさめづらしと神もみるらし

朝木枯 職仁

むら鳥のねぐらをいづる声そへて林にさはぐ今朝のこがらし

鷹狩 道前

くるゝまでとだちもとめて狩ごろもすそ野をなをもわくるたか人

炭竈 規長

山ふかくやくすみがまにたつけぶりゆきげの雲と見るもさむけし

忍久恋 家仁

うき中につゆのみだれもしられじといくとし月をしのぶもぢぢり

海上霞 尚実

のどけしななみのちさとのみるめさへかすみわたれる春のうなば

ら

別恋 為村

消ぬ身をかこつわかれもふかき夜につれなくのこるねやのともし

火

頭恋 資枝

さはるべき人めをよきしあふこともたがりしそめて世にはもれけ

む

恨見恋 内前

とにかくに人のつらさもわがとがとみをうらみつゝ過すとし月

旧恋 重熙

おもひ出てなをこそしたへつれなしとうらみしふしのむかしがたりも

松積年 典仁

此神の御まへの松はことの葉のさかへを代々にみする陰かも

巖苔 隆望

うごきなき巖の苔のふかみどり幾年ふとも色はかはらじ

鶴立淵 為敦

朝なぎの見るめもはれてすゑとをくすざきに立る波の白鶴

名所市 雅重

朝な夕な何をうるとかそであまたたつの市ばにたちさはぐらむ

述懐 為村

道のまもり君にへだてぬ神がきのもとのおむけをつくも幾千代

松鷲 兼胤

うぐひすも千とせの春やまつつげて此神がきのまつになくらむ

御奉納 石見国

明和四年五月十八日神本社
御法衆 (表)

祝言 職仁

いく千世と道のさかへをまもりまます高角山の神のみづがき (裏)

(四)

光格天皇宸翰三葉 以下五十葉 五
後桜町上皇宸翰三葉

山早春

石見のやたかつの山の朝霞たな曳そむる神がきのはる

聞郭公

一声は雲のよそなるほととぎすなをいく夏もこゝにかたらへ

松鷲

のどかなる声たかつの、春なれや松に千とせの枝のうぐひす

故郷柳 資枝

かへりみる人やこゝろをひかるらむつゆふるさとの青柳のいと

夜帰雁 雅威

あくるまでかへさやすらへ春のかり花と月とにかすむ夜のこゑ

峰春月 織仁

雲はる、峰もかすみてかた匂ふたかつの山の春のよのつき

尋花 延季

あすは又やま路をかへてたづねみむとく咲いづるはなのありやと

見花 資董

夕月の影もがきて日ぐらしにみれどもあかね花のこの本

落花 忠言

かすみして砌のまさき色そへていくへにつもる花の白雪

春山田 伊光

春ふかみみねの雪消にやまだなるなはしろ水もうるふゆたけさ

歎冬 為泰

枝たれてなびくさかりにやまぶきははるをしめたる花の八重がき

新樹 治孝

夏来ては梅もさくらもおなじ色にみどりかさねてしげるすゞしさ

早苗 公明

いく千町あぜ行水をせきわけてあまたの田子のさなへをぞとる

夕立雲 光美

ひとむらとみるがうちよりかさなれる雲をいく重の夕だちのそら

夏月 為敦

石見瀧かみのころの涼しさはつきにしらるゝ夏の夜の空

瞿麦 重尹

ちりなゝばはらひてぞみむ朝ゆふに露のたましくとこなつのはな

梅風 美仁

そらだきのそれかあらぬか春風のふきいるゝ窓にほふ梅が香

納涼 為章

かげしげき木のしたすゝみ暮かけて月まつそでにかよふ夕風

草花 邦頼

頼なく花のにしきに置あまるつゆも色なるのべの八千ぐさ

野外虫 持豊

秋の野のちぐさにものおもへばやゆふべはむしのたゑぐに鳴

岡鹿 重嗣

露じものをかべの鹿はもみぢ葉のいろにこがるゝおもひなるらし

浦秋夕 深仁

石見がたうら波とをく霧こめてみるめさびしき秋の夕暮

橋月 為泰

影やどすかは波かけてひとすぢにつきすみわたる水のうきはし

関月 美仁

ふみならず関のいはかどひく駒のあとさへみえててらす月影

擣衣 光祖

秋かぜのさむくなるより音たてゝよなく賤やころもうつらむ

秋時雨 為良

紅葉ゝを染わたすとやたつ雲のしぐれてかよふ秋の山々

残菊句 通根

置霜の色をさかりも秋ふかみつきぬ匂ひはのこるしら菊

紅葉 隆建

ひまもなくそむるしぐれに秋の色も千入なるらし木ゝのもみぢ葉

海上霞 政熙

海原や春ひとしほの色みせてなみの千里もかすむ朝なぎ

惜秋 政熙

おしめども秋はとまらで夕ぎりの立わかれゆく名残をぞ思ふ

朝木枯 織仁

夜半に吹こののはの後はときはぎをねたげにしほるけさのこがらし

寒声 公明

さぼさしてゆく舟さむし芦のはのかれのこるかたにむすぶ朝しも

巖上苔

うごきなくたてるいはほの苔ごろもいく世かけたるみどりなるら

む

河千鳥 資矩

舟でするきしねをたちて行河のなみかぜとをく千鳥なくこゑ

初雪 雅光

神がきの松の梢にめづらしくひかりをそへてつもるはつ雪

深雪 為則

かげふかき雪のひかりはたかかつのゝ山まつがえの千代をつむらし

鷹狩 俊親

なごりなをむかふゆふ日に一よりととだちもとめて分るかり人

炭竈 深仁

まつの葉のみどりもわかずやく炭の烟にくもる山もとのさと

忍久恋 美仁

いはでおもふ心ひとつの年月はいのちをたのむ契りなりけり

待恋 資枝

人よしれまつよひ更てねやの戸のすきまの風におもひそふ身を

月出山

出がての光をそらにまちむかふやまの端のぼる月のくまなさ

立名恋 邦頼

人めのみつゝむとすれどそでの色のはやくもよそにうき名立けん

恨身恋 為章

恋ごろもちぎりへだてゝうらみのみわが身の外ぞやるかたのなき

旧恋 治孝

絶にしを思ひつゝけてなげくかなちぎりしことはいつの年月

松積年 織仁

千年へむかげは九重ふかみどりまつのかかへを君にならべて

別恋

したひわび袖は涙にかきくれてわりなきものよ衣々の空

晴天鶴 光祖

晴わたるみどりの空にしらつるのたちまふ翅よそめまがはぬ

名所市 持豊

をのがわぎをたつの市人にぎはへどあらそはぬ世ぞゆたかなりけ

る

述懐 雅威

言の葉のさかへをよばふ松風はたかつの山の万代のこゑ

御奉納 石見国

寛政十年三月三十日神本社御法業 (表)

祝言 為泰

あふぐにもまもりかさねて高角のやまとことの葉道ぞさかゆく

(裏)

(五) 仁孝天皇宸翰三葉以下五十葉

恋衣

裏なくもかさねし物を人ごゝろへだてしこひのころもへにけり

卯花

ほとゝぎす声をももらせ庭の面のかきねのうつき花ざかりなる

早春

石見野や高津のみやにたつ霞めぐみの春のひかりみせつゝ

残雪 職仁

石見がた高つの山にかつ残るゆきも花かと春はみえけり

春月 為脩

さかりなる花の千里の春の月霞へだてず影にほふそら

花盛 忠熙

君が代のはるにさくらの花なればちらでさかりのひさしかるべし

雲雀 幸経

夕ひさり日かげうつれる雲間よりそらにのみこそ声を聞らぬ

野遊 公恪

霞ぐみすみれ摘つゝ春の野にかへさおもはであそびくらしつ

堇菜 康親

一夜寝てあすもつまゝしひばり鳴しげ生の床の花のすみれな

惜春 斉信

花鳥の色ねもともにさそひ行はるのわかれぞ猶おしまるゝ

首夏 韶仁

世々に名もたかつの山の峰高く青葉うちはへ夏はきにけり

草螢 有功

夕されば床なつかしき草むらをたちてほたるのいづちゆくらん

郭公 雅光

神きけとこゑをやたむげ高角のやま陰しめて鳴ほとゝぎす

橘風 延光

露ちりてかほる軒ばに立ばなのそでに涼しくかよふゆふかせ

夕立 泰聡

山のはにかゝるとみしも里あまはやく過行ゆふ立のくも

梅香 為則

花の雪ひかりもあまるたち枝よりかすみてにほふかせのむめぞの

对泉 為全

むさびつる心のそこにあきもすむいはがね清水かぜをたゝへて

立秋 政通

かぜすゝしきのふにかへてたか角の山はいく世の秋やたつらん

栽萩 能光

うへてみる籬の花に宮城野のゆかりの色をうつす秋萩

尋虫 基延

野を広み夕つゆしげき草むらにすだくか虫の声をたづねん

聞鹿 永胤

まはぎ咲野べたちならし小男鹿の妻とふ声も色をそふらむ

馴月 幟仁

久堅のあまつをとめや馴てみむひれふる峰の月の出しほ

秋田 為理

豊年の秋の田面の稲むしろしきかさねたる色は幾町

霧深 久雄

霧ふかく高角の山にたつとしもひかりへだてぬ宮るならまし

翫菊 忠香

かざしめてこのかみがきに千々の秋を契ることばの花の白菊

黄菊 行遠

しぐれをもまたで露より染渡す柞のもりの秋のはつしほ

暮秋 実久

しもの色もふかくなりゆく長月の末のゝまくずうらがれにけり

時雨 為則

か□^(ひた)にいまうきたつ雲もたかつのゝ山かぜさえてしぐれふる空

寒声 為知

をく霜はかれ葉にさえて江の波も氷るみぎはのあしの村立

松霜 斉信

十かへりのばなとみるまであさなくしも置そふる庭の松が枝

池鴛 在賢

毛衣は雪をかさねていけの面のこほりのひまにあそぶをし鳥

都雪 政通

たかきやもわらやの軒もをしなべて都はゆきにひかりそへけり

炭竈 実建

山松のみどりもわかず降雪にけぶりぞほそき嶺のすみ竈

神楽 雅久

神代にもおりかへすかとおもしろくうたふさかきや本すゑの声

恋鏡 忠熙

わればかりむかふ鏡のうちにしもこゝろのうつす人の面かけ

恋枕 為則

むすびあふ契りはともにしのびねの恋をしるこそ枕なりけれ

柳露 雅典

此朝げひかりかすみて青柳のいとむすべる露を見つらむ

恋帯 隆純

行末も心かはらじ下帯のとけて逢夜の契り忘るな

恋笛 顕孝

あだならぬ思ひのたけをふく笛のねにもかよひて心とけなむ

恋弓 公直

あひみねば人のなさけもしら弓のいつまでつらく心ひくらん

恋扇 通知

てすさびにひとりならずはかぜもうしうすき契りの閨のあふぎを

恋舟 有長

うきふねのちぎりも今はあだ波のよるべしられぬ中と成けむ

山雲 韶仁

所から名にもたかつの山端にはなとまがへて雲ぞかゝれる

関路 輔熙

明行はむまやづたひのすゞのをともいさみてこゆるせきの下みち

滝水 季知

日の影にさらす糸かとみれば又たまの数ちるたきつ岩がね

海辺 治資

うちよする磯べの波にくりかへし声かはしつる松のうらかぜ

旅行 為全

かみ山とかはるながめにうさはれてたびぢ分るも日かずへぬらん

庭竹 光政

九重のうてなにしげるくれ竹はきみがへぬべき千世の数かも

浏览 光成

かげさそふみどりも深き竹河にすむてふ淵のかめのよろづよ

御奉納 石見国 (表)

天保十四年六月十一日 柳本社 御法案

祝言 雅光

すなほなる道はいく千世さかへつゝあふぐもたかきやまと言の葉

(裏)